

三
崎
畠
舎

I 自然と労働 原典に即した、原則的な考察

— 1 — 人間と自然とのかかわり——自然認識の原點としての労働
マニエラは「資本論」のなかで、人間と自然との目的、意識的
なむかたり、つまり労働について次のように述べている。少し長
い文章だが引用してみることにしよう。

・「労働者にとっての自然認識」『生活教育』誠文堂新光社 1973年6月 pp. 104-111

欲望をより充実したものにしていく活動である。

この文章には、われわれが労働の問題をどう見るかの立場が、明確に示されています。これが、理的なことがらを的確かつ簡潔にいいあらわしている。これをいくつかの側面から整理してみるとよいでしょう。

第一に、労働は、それがおこなわれることによって、そのうちに存在していた目的を実現するための目的意識的な活動である。

第三に、労働は、人間が外部の自然に働きかけて自分の命をかぎりをもって充足させるだけではなくに、内部の自然である自分の肉体に働きかける

る頭脳の働きを発達させ、言語を生みだし、知識をつくりだすなどして人間としての能力を發揮・発展させる活動である。

会の滅亡につながる。

つまり「人間は、自然素材にたいしてかれ自身一つの自然力として相対する」のであるが、人間以外の動物、たとえば、くもや蜜蜂などのように、二つの自然力の相互作用という形で自然に對峙するわけではない。自然素材に対する人間的な自然力は、一方では腕や脚、筋肉の機械的活動と、他方では脳髄の、腕、脚を媒介し規制し、制御する指導的・統制的活動との二つの契機をもつてこよによって「労働力」となるのである。動物の本能的行為と質的に違っている点である。またさきに第一、第二として整理したように、「人間は、この運動によつて自分の外の自然に働きかけてこれを変化させ、そうすることによつて同時に自分自身の自然を変化

の諸力の蓄みを彼自身の統御に従わせる。——中略——くもは、蟻丘の作業と似た作業をするし、蜜蜂は、その蟻房の構造によつて、多くの人間の建築師を赤面させる。しかし、もともと最悪の建築師をえさせ最も良の蜜蜂にもまさるとするには、建築師は蟻房を蟻で築く前にすでに頭のなかでそれを染いでいるということである。労働過程の終わりには、その初めにすでに労働者の表象のうちに存在し、したがつて観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。その目的は、彼が知つてゐるものであり、法則として彼の行動のし方を規定するものであつて、彼は自分の意志をこれに従わせなければならぬのである。そして、これに従わせるということは、ただそれだけの孤立した行為ではない。労働する諸器官の緊張のはかに、注意力として現われる合目的的な意志が労働の継続期間全体にわたつて必要である。しかも、それは、労働がそれ自身の内容とその実行のし方とによつて労働者を魅すことなどが少なければ少ないほど、したがつて労働者が労働をかれ自身の肉体的な、また精神的な諸力の自由な蓄みとして享楽することが少なければ少ないほど、ますます必要になるのである。

——2 労働過程——自然認識から社会認識へ

させる」のであるが、労働は一方では、人間による自然の変化を加工という側面をもち、他方では、人間による人間の加工・変質を促進する側面をもっている。とくに教育の人間による人間の加工・変質は、自分ひとりばかりでなく、同時に集団・社会への効用をもつてゐる。そういう意味で、労働というのは、いうならばきかけでもある。そういう意味で、労働というものは、肉体労働と頭脳労働とを統一する活動であり、またそれは、労働の技術的過程と組織的過程との統一物でもあるということができるのである。

労働は、「人間と自然とのあいだの一過程」であった。この労働過程は、I—1で問題にしたような「目的意識的な活動つまり労働そのもの」そして「労働対象、および労働手段」の三つの契機、要因からなっている。この三つの契機のうち、ここで問題にされるのは労働手段である。マルクスは「なにがつくられるか」ということではなく、どのようにして、どんな労働手段でもつてつくられるかと、いうことが、経済的諸時代を区別する。労働手段は人間の労働力の発展の測度器であるばかりでなく、労働がおこなわれるさいの社会的諸関係の指示器でもある」と指摘している。よくいわれるよう、生産関係は生産力によつて規定されるが、生産力を構成するもののなかで、きわめて重要な役割を演ずるのは労働手段である。労働手段は、人間が自分と労働対象との間にさし入れて、対象に対して自分の活動を伝導する物的手段で、道具から機械、機械体系、さらに容器から装置、装置体系へと発展してきている。これらの労働手段は、労働過程を通じて人間自身の自然的諸器官にならつて、その延長として形づくつてきた。(つまり

前者は筋骨系統、後者は脳管系統と対比することができる。さらに現在労働手段は、人間の神経系統に対応する通信、伝達機器からコンピューターに連動された情報システムへと発展してきている。

「労働と労働手段の関係についてエシゲルスは、「猿が人間になるについての労働の役割」のなかで次のとおりに述べている。

「労働は、道具の製作と共に進む。……もともと古い道具は……奪りと魚とりの道具であり、前者は同時に武器でもあった。しかも狩りと魚とりとは、單なる植物食から、肉食の併用への移行を前進としている。……植物食をもろんで肉食の習慣をもつたことが、生産過程にある人間に体力と独立性をあたえたるに、大いに役立った。だがいちばん本質的なことは肉食が新におよばした作用である。猿はいまやその栄養と発育とに必要な物質が以前よりずっと豊富になされこんできて、その結果脳は、世代から世代へとますます急速に、また完全に発達することができた。」

「労働の発達は、必然的に社会の成員たちをいつそう結びつける助けとなつた。というのは、労働の発達によつて、相互扶助や共同作業をおこなう機會がふえ、そしてこの共同作業が各人にとつて有用であることがつきりと意識されたからである。要するに、生成しつつある人間は、たがいになにかを話しあわなければならぬところまできた。必要はその器官をつくりだした。……

言語が労働のなかから、また労働によつて発生した……」

「はじめに労働、ついでそれとともに言語——この二つこそ、

サルの脳を、あらゆる点で似ているがずっと大きくてもつとも完全な人間の脳に、しだいに変化させていったもつとも本質的な推進力である。しかも、脳のいつそうの発達とあいたずさえて、そ

れにいちばん密接な道具である感覚器官の発達がおこつた。……脳とそれに奉仕する諸器官の発達、ますます明瞭になつてきた意識、抽象力および推理力の発達は、労働と言語に反作用をおよぼし、この両者のいつそうの発達のためにえず新しい刺激を与えた。そして、労働と言語とのいつそうの発達は、……できあがつた人間の登場とともに漸しく加わつた「要素」——社会によつて、一方ではいちじるしくおしすすめられ、他方ではいつそう特定の方向へと向かれていたのである。」

つまり、まず労働手段——道具の創造と使用は、人間を物質的、肉体的に束縛する自然から解放し、労働を真に人間的な活動にまで発達させた。

また、労働手段の創造と使用は、目的意識によつて自然を改造

し、利用する活動を飛躍的に発達させ、人間の活動を合目的的、合法則的なものにし、かくして、人間を他の動物から区別する独自活動にしていった。

さらに、労働手段の創造と使用は、人間が自然封棄に直接働きかけるのではなく、それ自身客観的な存在である道具を媒介にして働きかけることを可能にし、そのことによつて労働の生産性をいちじるしく高めるばかりではなく、労働手段と労働対象、労働手段と目的意識的な活動つまり労働そのもの、とくに手と道具など事物間の連関を客観的に認識する可能性をきりひらいていた。

そして、この労働の技術的過程は、労働のなかから、また労働

によってつくりだされた言語を媒介にして同時に労働の組織過程

を形成し、組織的過程の発展を通じて技術学的労働、科学的労働、

芸術的労働などを分化させていく。

I-1-3 認識の展開——技術的認識と科学的認識の相互媒介関係

「歴史のあけぼの」の中で、著者G・チャイルドは、「樹の枝を折り、石をぶつかいて作った、もつとも簡単な道具でさえも、長いあいだの経験、試みと失敗、観察し、記憶し、比較された印象の産物なのである。そして道具を作る技術は、観察と記憶と実験によって得られたものである。そういうえば誇張のように思われるかもしれないが、どんな道具でも「科学」の化身であるといつても誤りではない。なぜなら、それは記憶し、比較し、収集された同種類の経験の実際的な適用であつて、その意味では、科学の公式や記述や規定に体系化され、要約されたものと同じ種類の経験なのである」といつていている。

別の角度から事態の同じような性格を科学史家J・D・バナーは「歴史における科学」の始めの章でいつていて、「歴史をみるとほとんど正反対の順序をふんでいる。すなわち社会組織、狩猟、家畜、農業、野菜、料理、衣料製作、冶金、車両と航海、建築、機械、機関である。この理由は容易にわかる。技術は人間の環境に身近に関係したものから起り、それからだんだん無生物界の利益となつた有用な応用の可能性について密接に符合している」と。たとえば「道具の製作と使用によつて、人間はその意識

れにいちばん密接な道具である感覚器官の発達がおこつた。……脳とそれに奉仕する諸器官の発達、ますます明瞭になつてきた意識、抽象力および推理力の発達は、労働と言語に反作用をおよぼし、この両者のいつそうの発達のためにえず新しい刺激を与えた。そして、労働と言語とのいつそうの発達は、……できあがつた人間の登場とともに漸しく加わつた「要素」——社会によつて、一方ではいちじるしくおしすすめられ、他方ではいつそう特定の方向へと向かれていたのである。

つまり、まず労働手段——道具の創造と使用は、人間を物質的、肉体的に束縛する自然から解放し、労働を真に人間的な活動にまで発達させた。

また、労働手段の創造と使用は、目的意識によつて自然を改造

し、利用する活動を飛躍的に発達させ、人間の活動を合目的的、合法則的なものにし、かくして、人間を他の動物から区別する独自活動にしていった。

を示す、む般統的な実践としての労働過程が、猿を人間にかえたこと、そればかりでなく、この労働過程のもつてている技術的側面と組織的側面とは、労働がほんらい頭脳労働と手の労働を統一したものであるので、技術と科学を分析発展させえたのだということを明らかにしている。

金属性官とは、神経中枢である頭脳の媒介、規制、制御機能によつて、一方は求心性神経系を通じて感覚器官の受容した興奮を判断し、情緒を導入し、他方では迷走性神経系によつて中枢で分析、統合された結果の興奮・情緒を効果器・運動器官に伝達する。前者の過程を通じて、つまり外の自然・客観的世界を感覺し、知覚し、表象することによって脳に主觀的な映像として反映する。そこで既に形成された外的世界的表象を分析して本質を把握し、さらにそれを統合して現象を全体として再把握する。この現象を分析、統合する機能が人間の思考活動なのであって、この分析・統合機能が発展することによって、思考活動は判断、概念、推論という形で外的世界的理性的、客観的な認識を進めていく。つまりエシカルスがいうように「手と覚悟器官と脳の共同作用によつて人間は、各個人としてだけでなく社会としても、ますます複雑な作業を実行し、ますます高い目標をつかげ、またそれに到着できるようになつた」。労働そのものが、世代から世代へと進むあいだに、べつのいつそう完全でいつそう多面的なものになつていった。狩りと牧畜のほかに、農耕があらわれ、さらにこれにくわえて紡績、金属加工、陶器の製作および航海があらわれた。商工業とならんでついに芸術と科学とが出現し、種族から民族と国家とがあらわれた。法律と政治とが発達し、そしてこれにともなつて人間

自身のためではなく、資本家のために、つまり、労働者は彼の労働を所有する資本家の管理のもとで、また、労働の生産物は直接生産者である労働者の所有物にはならないことを前提にした生産活動一労働過程にはいりこむのである。使用価値を生産するという労働過程の一般的性質は不变でありながら、では資本家はどのような生産を資本主義生産として展開しようとするのだろうか。

「われわれの資本家にとつては、二二〇のことか別事」。されど、彼は、その生産のために要した諸商品の価値総額よりも、すなわち、彼が商品市場で大切な貨幣を前貸しして得た生産手段および労働力の価値総額よりも、高い価値をもっている商品を、生産しようとする。彼は一つの使用価値のみではなく、一つの商品を、使用価値のみではなく価値を、そして、価値のみではなく、剩余価値をも生産しようと欲する。だから資本主義的な生産は、商品が使用価値と価値の統一物であるように、その生産過程は、労働過程と価値形成過程——とくに剩余価値の創出過程とを統一したもののとなるのである。つまり、資本主義的な企業の活動は個々の会社とよばれる組織は、この経営的契機と企業的契機を統一した組織体なのであるが、後者の要因が主導力をなしているところから、会社を企業体とよんでいるのである。したがつて資本主義社会における生産が、とくに工業生産が主として企業の手で行なわれるに、彼は、交換価値をもつてゐる使用価値を、売ることを予定された品物を、すなわち商品を、生産しようと欲する。また第二

1111
資本主義社会における労働過程—自然認識の棲外

れ、そこで労働過程が、Iで考察した創造的・発展的なものでありうるのか、いかなかということが問題にならなければならぬ。人間疎外現象が、労働者の自然認識をどのように阻害し、ゆがめているかということを問題にしなければならない。

III-2 分佈の政外 分佈の政外

社会科学論典によると、現行社会の上層階級は、そのなかで個人の意志や願望がおしつぶされるとか、人間が機械の付属品として機械に支配されるとか、あるいは、商品・貨幣関係のなかで人間同志の心のふれあいがなくなるなど、なんらかの非人間的な力によって人間的なものが圧迫され、破壊されるという状態を疎外と概念規定している。よく知られているように疎外概念は、フィヒテ、ヘーゲル、フォイエルバッハそしてマルクスという思想的な系列をたどって発展し、充実してきた。とくにマルクスの疎外概念は、他のそれと違つて、疎外現象を一定の歴史的情条件のもとで生まれてくるものとしてとらえ、とくに資本主義的過程と不可分な関係にある。いいかえれば、労働者は自己展開をとげる労働過程が、資本主義社会にあっては価値形成の私的所有、敵対的な分業状態が生みだす労働の疎外に注目した。II-1で問題にしたように、本来的には人間の創造的、発展的な力を商品として売らざるをえない。労働力商品の買手たる資本家は、労働力を彼の管理のもとで商品市場で交換価値を実現できるような使用価値をもたないものの生産のために労働力を消費するのである。そこでの労働は疎外された労働にならざるをえないことは当然である。

II-1 資本主義社会における労働過程—自然認識の練外
Iでの考察は、労働の本源的な形態、原始的な姿が主な対象であつた。そこでは、労働と労働以外の活動、いうならば生産的生活と消費的生活とが未分化な段階での労働の意義がすぐれて問題にされた。その限りでは、労働のもつている人間疎外的な働きではなく、創造的、発展的な役割、さらには人間にとつての決定的は意義が明らかにされえたわけである。したがつてマルクスも「資本家が労働者につくらせるものは、ある特殊な使用価値あるいは時の生産は、それが資本家のために、また資本家の管理のもとに行なわれることによって、その一般的性質を変えるものではない。したがつて、労働過程は、最初はまざいかなる特定の社会的形態からも、独立に考察されるべきものである」として Iで述べたような（もちろんほんの一部であるが）分析を試みたのである。ところが資本主義社会における労働は、労働者が自分

然だろ？なぜなら、労働者が生産したものは資本家の私的所有に帰するのだし、資本家と労働者、いかかえれば、監督、指揮労働と生産労働という敵対的な分業の固定化、つまり階級分裂、階級对立が不可避だからである。

生産と生産以外の生活とが未分化な社会において、人間の自然主義は、労働の発生と共に、労働過程の中で、労働手段を媒介として、労働対象即ち自然的素材に働きかけることによって、自然之natureと自然の、既てある人間(Homo natura)との両者の変化と変革を伴って展開していった。だからJ·D·バテールが指摘したように、技術の発展が、社会組織、精神、家庭……機械、機関……系譜をもつてゐるのに対し、科学の発達順序はこれと反対に、数学、天文学……生物学、社会学と進むのである。つまり、行動と認識の発達は、技術と科学の発展とに対応している。そしてとくに認識の発達は、自然認識から社会認識へ、自然科学的認識から社会科学的認識へと相互媒介的に発展していく。労働過程が技術的側面と組織的側面とを統一した過程であるからである。とくに自然認識が社会認識へと転化していく契機は、生産の発展が、それまでの生産を支えていた人間関係が、古い、拘束的なものにして認識されたときである。いわゆる生産力と生産を支える社会関係つまり生産関係との矛盾が激化したときである。なましく、社会認識が社会科学的認識へと発展していったものは市民社会の成立、発展期であった。近代市民が封建的な秩序、拘束から解放され、ひとりの人間として自由、平等に行動するという市民社会の原理は、実は資本の利潤追求にとって欠くことのできない条件であった。近代市民的な自由と平等、つまり私有財産権と自由な経済競争に対する保護が、民主政治と自由主義一資本主義

経済の正当性の主張となり、近代市民社会が私有財産と自由競争にもとづいて形づくられ、発展していくのは、いわば、一つの自然法則が支配しているからだとする論証が初期の社会諸科学を体系化していく。このようにして封建的な経済体制の中で束缚されていた近代市民ブルジョアジーの社会認識が社会科学を生みだした。ところが資本の運動法則は、生産の社会的性格と生産物取得の私的形態という根本的矛盾をもつた資本主義的機構をつくりだしていく。この機構は、個人の意志や願望とは独立した、そこに労働者にとつては抑圧機構として立ちあらわれる。労働者は、資本主義的な生産の中で自然認識から疎外され、そのことによってかえつて社会認識を、労働者自身を解放していく社会認識を、社会科学を形づくっていく。それはHuman natureつまり人間の本性に根ざした、つまりヒューマニズムにもとづく認識となるざるをえない。ヒューマニズムは人間の自然的本性の自由な発展の権利の主張から生まれた。今やそれは社会発展の法則の科学的認識にえられて飛躍的に発展する条件を成就せつてある、といつていいだろう。

(和光大学)

